［新連載］
人生の終わりの日々のケアを訪ねて

医療ジャーナリスト
村上紀美子

第❶回

心通う看取りケアが，病院に広がるように

多死社会の波が押し寄せてきました。臨床の場は重症者，高齢者ばかりで，いつも生と死が隣り合わせかもしれません。あなたは，どんな旅立ちが心に残っていますか？

「できれば在宅で最期まで」と願っていた90代のAさん。でも現実は，がんの症状がきついし妻は高齢，子世代は離れて暮らしているし仕事が忙しく家庭介護は難しそう……。信頼できる病院で，治療は最小限にして面会は自由で，最後の日まで家族との時間を過ごして旅立ちました。

病院の大勢の患者さんの中には，死の話題に困ってしまう，退院や転院した後が気がかり，死期が迫った方のいる病室に入るのがつらい……そんな気が重いケースもあるのではないでしょうか。人生の終わりの日々のケアに慣れないスタッフは，とくに。

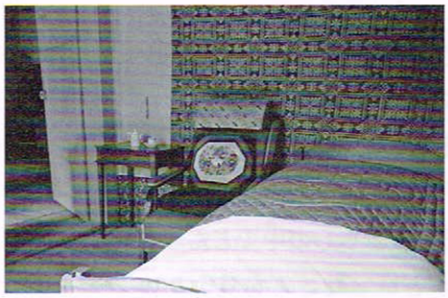
3つの目線を織り交ぜながら

「医療の進歩で，死亡率が下がる」という話は聞きますが，考えてみると死亡率0%はありえません。命あるもの全て死亡率は100%です。誰にも必ず来る人生の終わりの日々のケアは旅立つ人，送る人，看護管理，どの立場から見るかによってずいぶん異なります。

〈旅立つ人の目線に立つと〉死をめぐる書籍や，自分の死を計画するエンディングノートをよく目にします。医療や介護の場では「自分はどこでどんなふうに人生を終えるかの希望＝アドバンスディレクティブ」を聞かれます。答えが見つかっていればよいのですが，「自分が息を引き取るなんて想像したくもない，その時のケアの希望なんて見当がつかない……」という人も多いのでは？

〈送る人の目線でみると〉永遠の別れが近づいている寂しさ，病院から突然呼び出されて駆けつけたのに冷たい待ち合い場所で長く待つだけ。人間関係のわだかまりが解けないまま時間切れになりそう……など複雑な人間模様の真っただ中で心は波立つばかり。でも，サポートはあまりないという状態もありそうです。

〈看護管理の目線では〉日本では，死亡の場は在宅死（ケア付き住宅含む）が増えてきたとはいえ15%だけ。病院が85%（2016年時点）で，病院は人生の終わりの日々を過ごす場なのです。ならば，これからの看護管理は，治療と同じほどに，「人生最後の日々のケア」を強化する必要があるのではないでしょうか。



さまざまな人生最後の場
最後の言葉「もっと光を」が有名なゲーテ（18世紀の政治家で文豪）は，ベッドのわきのこの椅子で，息を引き取ったそうです。（ドイツ・ワイマールのゲーテミュージアムにて）

看取りケアを話し合うきっかけに

海外を見ると，英国やデンマークなど，在宅死が多いイメージの国も，病院で亡くなる人が半数以上で多数派です。どこで最期を迎えるにしても（病院，自宅，ホスピス，ケア付き住宅など），どんな病気でも（がんでも，ほかの病気でも，老衰でも），最後の日々を大切に過ごせることを大事にするケアを模索しています。その中心はどの国でも看護師なのです。

本連載では，人生の終わりの日々のケアを，人間くさいリアルなエピソードと，各地の写真で訪ねてみようと思います。病院で，看取りケアについて話し合うきっかけとなるように。どのスタッフも人生最後の日々を過ごす本人や家族・友人に向き合うことが苦痛や恐怖ではなく，落ち着いて気持ちよくできるように。日本人の8割が亡くなる病院で，心通う看取りケア強化の一助になれば幸いです。

むらかみきみこ◉日本看護協会の調査研究部から広報部長ののち現職。ターミナルケア・在宅ケア・医療安全のテーマで，国内各地，海外10か国を継続取材中。著書に『患者の目線―医療関係者が患者・家族になってわかったこと』（医学書院），岩波新書『納得の老後―日欧在宅ケア探訪』。

0917-1355/18/紙：¥500/電子：¥750/論文/JCOPY